

# 双生の泥濘

つばある。

## 第一章 無防備な蜜月と、秘められた白濁

俺たちは生まれた時から離れたことが殆どなかった双子だ。

小中高と同じ学校に通いこれからも同じ進路に進んでいくんだと思っていた。なのに俺の弟は俺とは違う進路に進み、俺とは別の大学を受験して自分だけ違う進路を考えていた。

俺と弟の靖友はいつの間にかお互いに距離ができ、靖友には一番大事なものが出来ていて、それは、俺と靖友

の幼馴染の彼女だ。俺も彼女の事を愛していたのに彼女と靖友はお互いを選んだ。それがなんだか無性に許せなかった。靖友と彼女は俺ではなくいつの間にかお互いが一番大事なものになっていた。俺だけ仲間外れで。

大学生になって靖友は一人暮らしを始めた。そのこともあり俺は幼馴染とも疎遠になりつつある。けれど俺は靖友の住所も知っていたし、幼馴染の彼女のことがあるから靖友が一人暮らしを始めたのも、結局自宅だと俺がいるから、靖友と彼女は俺に気を使うから、俺から逃げるように靖友は一人暮らしを始め、幼馴染の彼女と一人暮らしの自宅で隠れる様に会っているのも知っている。俺と靖友は顔は瓜二つなのに何が彼女を射止めるきつか

けだつたのだろう。俺にはわからない。靖友と唯一違うのは俺の左耳には二つピアス穴があること。あと俺は靖友と幼馴染が構ってくれなくなつて少しグレた。でも可愛いものでタバコを吸つたり酒を飲んだりするくらいだったけど靖友と幼馴染と大学で離れ離れになつて俺は心の均衡がおかしくなつて、夜遊びに明け暮れた。何人も女とも寝た。けれど一向に心は満たされない。俺は多分半身の靖友とこの世で最も愛してる女の幼馴染を失つておかしくなつたのだと思う。ある程度の遊びに飽きてきた時、ふと靖友がどんな生活をしているか気になつた。

正直、中学の終わりから高校にかけてグレていたのはどちらかというと靖友の方だった。靖友と俺は小さい頃からサッカーをしていて中学でもサッカー部に入り、う

ちの学校はサッカー強豪校でもあり、俺と靖友はかなり頑張って二人でサッカー部のダブルエースになった。俺と靖友は進路が決まる大事なサッカーの試合に出ることになっていた。

試合当日、俺は寝坊して靖友が先に家をでていた。靖友は軽く走りながら学校へ向かっていたらしい。そこで運悪くリードが外れた犬が車に轢かれそうなのを靖友が見て咄嗟に身体が動いた結果、交通事故に遭い靖友は選手生命が絶たれるほどの大怪我をした。運よく五体は満足でリハビリをすれば日常生活に戻れるということでも両親も安堵したけれど靖友にとって、このことは死刑宣告に近かった。大好きなサッカーを取り上げられ自分にはリハビリという過酷な試練が待っていることが確定

していた。俺は靖友の姿を見て、サッカー部を辞めた。靖友には気にしないでほしいと言われたがそんなのは無理だ。俺と靖友は二人でダブルエースだからこそ最強だったのに靖友がいないのに俺だけがエースになる自信はなかった。だから靖友を支えるためにリハビリを手伝ったり、時には靖友のやるせない気持ちに寄り添ったりしたけれど結局靖友はサッカーという希望を奪われて自暴自棄になってしまった。高校デビューとして靖友は見事にグレた。髪を染めピアスをして毎日夜遅くまで出歩いていた。俺はその時の靖友にはついていけなかった。この時から俺と靖友の関係はギクシャクしていた。俺と幼馴染の二人で靖友を支えていた。俺の方が靖友を支える時間が長かったけれど彼女が選んだのは靖友だった。俺

の献身は一体何だったのかと思う。今思えば、俺と靖友がギクシヤクしても彼女は靖友を見捨てなかった。だから、靖友は彼女を選んだんだろう。俺たち三人は生まれてから三人でいることが当たり前だったのに。



俺は全部がつまなくなつて靖友の家に行く。安い学生が住む三階建てのアパートだとわかる。外にはいくつか管理人さんか大家さんの趣味で置かれている植木鉢があり、ポストもあるけれど結構古い。鉄製の外階段がありそこを登つていく感じだ。靖友の部屋は二階の角部屋だ。俺はゆっくりそこへ行く。靖友がいるかいなかは

知らないがトントンと音を立てながら階段を登っていく。靖友の家の鍵なんてものは持っていないけれどなんとかするとは思っている。何故なら俺は靖友の家のポストや周りを確認してなんとなく鍵の隠し場所がわかってしまった。靖友と同じ思考回路なのが少し嫌になる。俺は鍵を見つけ出しそれを使つて部屋に入る。正直顔が靖友と瓜二つなので近所の人に見られても靖友だと思われるから咎められる心配はない。俺が部屋に入ると靖友は留守だった。部屋の香りや部屋の間取りを見て俺の知らない匂いと靖友の匂いと幼馴染の匂いを感じるのと同時に靖友の生活感を感じる。辺りを見回していると、靖友つて本当に頭の中がお花畑なんじゃないかと思つてしまう。大体、無用心にもほどがありすぎじゃないか？ 大学の

予定表を机の上に出しっぱなしだったり、鍵の置き場所がわかりやすいところとか本当に空き巣に入られても知らないよと思う。けれど、オレにとつてはマジで好都合。貼つてあるカレンダーには彼女が来る日に大きな花丸がしてあるし本当にバカなのつて思う。

まさか俺が靖友の部屋に侵入してるなんて靖友氣が付きもしないんだろなあ。

どうやら靖友は用事があつて出かけてるみたいだ。氣配がない。人の氣配を感じるのでそちらに目をやるとモゾモゾとベッドの中が動いていた。そつと中を覗いてみると前日靖友とえっちしたんだなあと思う雰囲気（きふき）の幼馴染の彼女が半裸でベッドで寝ていた。

唯一、靖友も彼女をも手に入れられる瞬間がある。ゾクゾクする。

靖友がオレを殺そうとした瞬間だけが靖友も彼女をも手に入れられる瞬間だと思ふと余計に。

もつと、靖友を深い沼に落としたい。もつと彼女を汚したい。二人が俺を忘れないように。俺だけが蚊帳の外じゃない、その瞬間だけを俺は待ち望んでる。

俺を殺す事で靖友は俺の事を忘れられなくなり、俺が殺されたことで彼女は俺の事を忘れられなくなる。

俺たちは三人でいる方が幸せになれると。例えば俺が二人に抹殺されても、二人は一生俺から逃れられなくなる。ああ……最高に幸せな瞬間だ。

「――続きは、彼女が泥濘に沈むまで双生の泥濘本編でお読みください。」

奥付

作品名: 双生の泥凪

著者名: つばあゐ。

発行日: 2026年5月28日  
(第一刷)

連絡先: <https://www.pixiv.net/users/23830593>